

海水・生活・化学連携シンポジウム開催報告

海水・生活・化学連携シンポジウム実行委員長 外輪 健一郎
徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部(徳島市南常三島町2-1)

日本海水学会若手会は平成26年9月29、30日の日程で海水・生活・化学連携シンポジウムを開催しました。企画の発端となったのは、海水学会や若手会の内部で誰ともなく東日本大震災の被災地のために何か活動ができないか、との声が上がったことです。東日本大震災で津波によって甚大な被害が発生したことは、海水をテーマとして研究を行っている学会会員の心に深く残っていたのででしょう。平成25年6月の海水学会若手会幹事会で、被災地支援のための活動案を検討することが決定されました。しかし、学会として被災地のために何ができるのか全く分からず、とても難しい宿題となりました。学会は学術情報の共有・交換を本来の目的としています。被災地支援とはいえ、街頭での募金集めや、がれき除去作業への参加などを中心とした行事は、学会として行うわけにはいきません。あるとき、清水健司先生(岩手大学)にこの件についてご相談したところ、大変貴重なアドバイスを頂きました。特に重要であったのは、被災地が抱えている重大な問題の1つが震災の風化であるというものでした。このころは震災から2年半が経過した頃でした。被災地では復興に向けて懸命な努力が続けられていましたが、既に震災関連のマスコミ報道、ボランティア数、募金額も大幅に減少していました。復興の長い道のりの途中で震災が風化してしまうと、復興に取り組む精神的な支えが無くなってしまふことを教えていただきました。そのうえで、被災地を一人でも多く訪問できるように何か行事を行ってはどうかとの提案を頂きました。

清水先生から頂いた情報をもとに、若手会役員で行事内容を具体化し、いくつかの開催方針を決定しました。第一は震災の風化防止のため、被災地で開催することです。清水先生には陸前高田市での開催を提案して頂きましたが、交通の利便性を考慮して一関市でシンポジウムを開催し、翌日に貸し切りバスで陸前高田市の見学を行うこととしました。第二点は、海水学会会員に限らずできるだけ多くの研究者仲間に参加してもらえるように、異分野の学術交流を行うことを目的の1つとして掲げました。このため会合の名称を、広い分野をカバーするように海水・生活・化学連携シンポジウムとしました。学会の枠を超えて多くの方に参加を頂くため、実行委員会や若手会の皆さんにご尽力いただき、多数の学会・団体に協力をお願いしました。その結果、最終的に公益財団法人ソルト・サイエンス研究財団様に共催団体として、32の多様な学会・団体から協賛団体としてご協力を頂けることとなりました。さらに、参加費は被災地のためのものであると捉え、余剰金はすべて被災地への寄付金とすることとしました。また、シンポジ

ウム前日には陸前高田市でのボランティア活動に参加することとし、自由参加形式でメンバーを募りました。このボランティア活動の内容は別記事で紹介させていただきます。

初めての企画であったため、不安も多かったのですが、多くの皆様のご協力のお蔭で、無事に当日を迎えることができました。当日は学会開催に最適の天候となりました。シンポジウムの会場は東北新幹線が停車するJR一ノ関駅から徒歩5分の距離にある一関文化センターでした。参加者数は61名でした。他学会会員の方も、本シンポジウムの趣旨に賛同頂いてたくさん参加して下さいました。これは主催者としてとても嬉しいことでした。

シンポジウムは招待講演と一般のポスター発表セッションという内容でした。講師の先生方を招待する際には、石川匡子先生(秋田県立大学)が奔走していただきました。その結果、千葉克己先生(宮城大学)、三浦靖先生(岩手大学)、堀籠義裕先生(岩手県立大学)の3名の先生方をお迎えすることができました。千葉先生は土壌改良をご専門とされており、津波を受けた耕作地の除塩技術をお話し下さいました。三浦先生は食品加工分野で活発に研究を行っておられ、工学的な視点で食品加工技術を見直すと、伝統的な食品加工技術を大幅に改善できるという講演を頂きました。お二人の御講演のあとはポスターセッションを行いました。ポスターは合計で35件でした。海水、生活、それに化学分野の広いトピックについて発表があり、活発に異分野の学術交流が行われていました。ポスターセッション終了後には堀籠先生の御講演を拝聴しました。内容はアンケート調査を通じて、大船渡市民の皆様が感じておられる復興の様子を分析したものでした。

シンポジウム終了後は、会場をホテルサンルート一関に移し、交流会が開催されました。交流会会場ではまず、ポスターセッションの優秀発表者に対する表彰式が行われました。受賞者は上妻利真君(神奈川工科大学)、前澤祥太君(日本大学)、小西駿介君(徳島大学)、寒川祐衣さん(徳島大学)の4名でした。東郷育郎先生に乾杯の御発声を頂き、食事が始まりました。岩手県で親しまれているお餅をはじめとするおいしい料理を囲み、講師の先生方も交えて楽しいひと時を過ごしました。

翌日の9月30日は陸前高田市の被災状況、復興状況の見学を行いました。参加者の皆さんには朝早くから一ノ関駅前に集合して頂き、2台のバスに分乗して現地に向かいました。陸前高田まではバスで1時間半ほどでした。陸前高田市の案内は、清水先生にご紹介頂いた、なつかしい未

来創造株式会社の服部直子さんにアレンジをして頂きました。まず現地の語り部の方にそれぞれのバスに乗り込んでいただき、被災した中学校、商店街のあった場所などを巡りながら、震災の様子をお話し頂きました。想像を絶する悲惨な災害に触れ、いつもは賑やかな皆さんも言葉を失っておられました。

見学の後は、平成26年9月に完成したばかりの箱根山テラスで、小休憩しました。ここから陸前高田の海岸線が見えるのですが、参加者の皆さんは震災とその後について考えながらこれを眺められたことと思います。記念撮影を終えた後、箱根山テラスのすぐ近くにある気仙大工左官伝承館へ移動して、昼食をとりました。地元的新鲜な魚をはじめとした料理を楽しむことができ、三陸の海の豊かさを感じることができました。

その後バスにて一ノ関駅に移動し解散となりました。参加者の皆さん、ガイドさん、それにバスの運転手の皆様のご協力によって予定通りの時間に見学会を終えることができました。被災地の現状や、復興の状況を知ることができ、極めて意義深い一日となりました。

精算の結果、本シンポジウムの黒字額は215,405円となりました。これは、震災孤児・遺児の就学支援を行っている、いわての学び希望基金へ寄附させていただきましたことをご報告いたします。

本シンポジウムの企画運営では、清水先生、海水学会の皆様、若手会の皆様をはじめ、本当に多くの皆様のご支援を頂きました。趣旨にご賛同下さり、要旨集に広告を掲載して下さった企業の皆様、海水学会の行事に初めて参加して下さった他学会会員の皆様、本当にありがとうございます。おかげで当初目的とした、異分野の学术交流と震災風化防止に少なからず貢献できたものと考えます。本活動は朝日新聞岩手版(平成26年6月13日)、食品新聞(平成26年10月17日)、たばこ塩産業新聞(平成26年10月27日)で取り上げて頂き、若手会の活動を広くアピールすることが出来ました。報道機関の皆様にも御礼申し上げます。

本シンポジウムは平成27年度も開催する予定です。復興支援をしたいと思っているが、何ができるか分からないという方は多いと思います。是非とも本シンポジウムに参加し、学术交流を行うとともに風化防止にご協力下さい。



箱根山テラス前での集合写真

日本海水学会若手会 復興支援ボランティア活動を終えて

海水学会若手会幹事 中村 彰夫

公益財団法人塩事業センター海水総合研究所(神奈川県小田原市酒匂4-13-20)

若手会では海水・生活・化学連携シンポジウムの参加者から有志を募り、前日9月28日(日)に陸前高田市市内において復興支援ボランティア活動を実施しました。

今回の活動は、特定非営利活動法人P@CT(パクト)の協力で実現できました。まず、この場をお借りして御礼申し上げます。

我々の担当作業は陸前高田市気仙川の河口から約1km内陸に位置する被災された住宅地の側溝の遺留品探しでした。作業場所はかつて人が住んでいたと想像され一戸一戸の区画はなんとか確認できましたが、家があるはずの場所には何も残っておらず、大津波によって町が壊滅した被害の大きさを目の当りにさせられ言葉を失いました。

陸前高田市は津波により死者・行方不明者2,000人、被害戸数3,000戸を超える甚大な被害を受けました。現在、がれきの撤去は大分進み、防波堤の復旧工事や市街地のかさ上げ工事が進められていました。

我々の作業場所も、今後、周囲の山を切り崩し、全域を高さ約10mほどかさ上げして町を再建する予定となっており、工事が始まるまでの限られた期間内に遺留品を探す必要があります。報道などでは遺留品探しは終了しているとのことですが、それはあくまでも重機が入る場所の話であり、側溝のように重機の入らない箇所については、現在もボランティアが手作業で進めている状況です。

ボランティア活動当日は晴天に恵まれ、総勢8名(社会人3名、学生5名)が参加しました。側溝に溜まった土砂やヘドロを外に出し、熊手とスコップを両手に土砂やヘドロの中を探索し続けました。我々が作業した側溝からは、毛髪や日用品が僅かに発見されましたが、残念ながら所有者を特定できるような遺留品は発見されませんでした。しかし、これで安心して土地の工事に入ってもらえるという実感がありました。

ここで、ご参加いただいた学生の声をご紹介します。

◆上妻利真(神奈川県立工科大学応用バイオ科学部)

私は、自分の目で被災地の現状を確認したいと思い、ボランティアに参加させていただきました。そこで、現地の変わり果てた姿と、もう一度やり直そうと頑張る現地の方々の姿に感銘を受けました。一番印象に残ったのは、津波により多くの家屋が流されてしまったのにも関わらず、一本の松だけが今も残っていることでした。その力強い生命力をみて、元気を分けてもらったように感じました。

このような経験は普段できることではありません。この機会を設けていただいたこと感謝いたします。また、是非とも活動を続けていただければと思います。

◆小西駿介(徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部)

日本海水学会若手会を通じて陸前高田市で遺留品探索のボランティア活動に参加させて頂きました。その内容は現在津波対策として行われている土地のかさ上げが進む中、まだ元の土地が残っている場所から遺留品を探索するもので、現地の方の「震災で家族を亡くした人の時間は当時のまま止まっているんです」という言葉が活動の中で一番記憶に残っています。私は初めてボランティア活動に参加し微力ながらも復興支援に携われたことで震災を身近な問題として感じる事が出来ました。

◆戸川貴裕(徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部)

今回のボランティアは、側溝内の土砂を掘り起こして遺留品を分別するという内容でした。参加していた地元の人から、「遺留品を届けると喜んでもらえる。」「この地区は近々埋め立てされ、二度と探索ができなくなる。」「参加者が少なくなっている。」などの話を伺いました。

私の中でボランティアは、多くの人を助けることという考えがありましたが、実際に現地の声を聞いたことで、個々のニーズに応えることもボランティアであると感じました。また参加によって、災害の風化を防ぐこともボランティアの大切な側面ではないかと考えました。

◆前澤祥太(日本大学生産工学研究科応用分子化学専攻)

一人だと尻込みしてしまうボランティア活動ですが、若手会を通じて参加することにより、同じ志を持つ人と活動をとまることができました。活動内容は、側溝に堆積した土砂から遺品や髪の毛を探索するというものであり、それらを見つけることが未だ行方不明の方を探す手になりなると思うと、探す手に自然と力が入ったことを今でも鮮明に覚えています。この経験を自己満足で終わらせるのではなく、感じたことを周囲の人に伝えることで、被災地復興に関心をもってもらう。これがボランティアの輪を広げるために今の私にできることだと思いました。

◆本井慶史(日本大学生産工学研究科応用分子化学専攻)

震災から3年経過した陸前高田は、切削機や大型のベルトコンベアが置かれたプラントさながらの光景になっていました。説明が無ければ、かつて町が栄え、人に溢れていたとは思えないような状況でありました。しかし、今回のボランティアを通じて遺留品探しを行った事により、かつての惨状や被害を痛感しました。また、今回の経験を通じて、残された人達から再び陸前高田に帰ってきてもらおうという思いやそれに対する地道な努力を感じました。「被

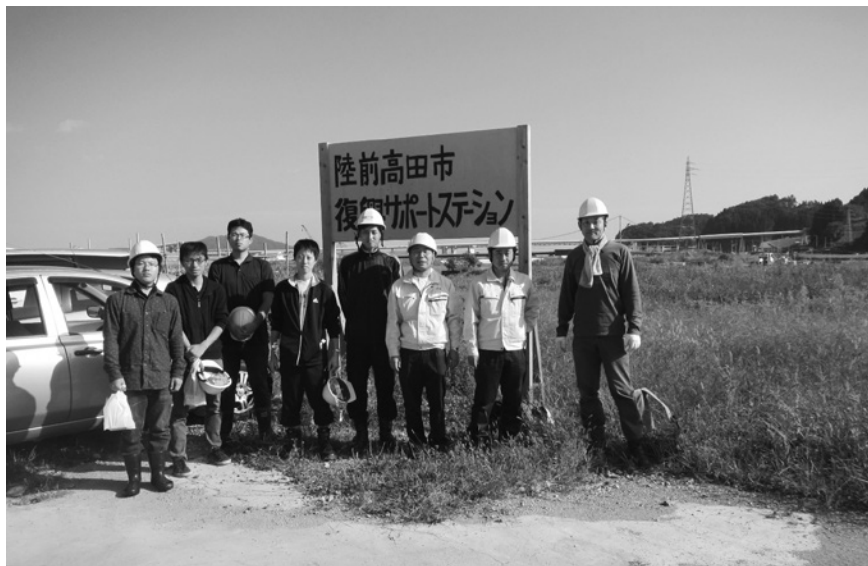
災地」ではなく「復興地」として歩み出そうとしていることを忘れてはいけないと思います。

以上、参加いただいた方にとって大変貴重な体験となりました。

今回お世話になった P@CT は我々が実施した作業の他

に、松の移植、花壇の整備、各地の除草、側溝の清掃、漁業の手伝い、かき小屋イベントの補助等と多岐にわたって活動されています。

若手会は今年の海水・生活・化学連携シンポジウムにおいても、復興支援ボランティア活動を企画する予定です。ご興味をお持ちの方はぜひご参加ください。



活動を終え復興サポートステーションにて